

富良野通信 2008

富良野通信十六年目

10年からの富良野からのお便りも今年で十六年目に入りました。何とか続けて来られたのもひとえに皆様方のお陰で心よき感謝申し上げます。

第二回目の通信は一九九一年七月十一日、富良野は麓郷の「空知川 いかだ下り」の話題をお届けしました。「北の国から」の純粋な参加していた大会です。私もこのドラムをきっかけに富良野にもってきたわけですが最近富良野に移住してきた人たちは「北の国から」は見えないという。十年一昔、四捨五入で昔の時間の流れですね。「通信せいの後数年は「北の国から」の話題が登場しました。九十六年にはホームページを開設。全国にお友達ができました。メロンのこと、鹿や狐など野生動物のこと、アイヌの話、愛犬たち、過疎の問題、などなど、なまら思いこきの話題で語り続けてきました。昨今の農業情勢は厳しいを増し農園もいつまで続けられるのかと心配しながらも一年一年粘ってまいりました。これから気合を入れなおしてがんばります。

市場開放 道新2008/1/10(木) 朝食農家より

日豪経済連携協定(EPA)交渉、緊く話し続けます。でも大事な話。新聞では「関税が完全撤廃された場合北海道の農家の三分の一が廃業する」との予想。関連産業を含め4万7千人の雇用が失われる。と書いています。少くばかり大げさに割の出しているように思えますが、大同小異ではないか。その記事にはオーストラリアの視察の様子が伝えています。

道農民連盟が平成十九年九月豪州東部ヤングという町の農家を視察しています。約80ヘクタール(豪州平均の四分の一以下、道内平均の40戸分以上)の農家の管理コストは約30万豪ドル(2000万円)だという

で日本なら同じ規模で4億円かかるという。日本農家がいくら努力しても無理なところがあります。生産品目によりますが単純に面積対管理コストを比較するのは乱暴な話ですが、あまりにも違います。お話しにならない。

これだけ安く生産できるから日本側は関税をかけて日本市場に輸入農産物を出回らないようにしているわけですね。ちなみに小麦の関税率は210%です。これだけを考えれば日本の消費者は日本の農家を護るため高い小麦を買わされていると云えます。ただこの問題になってくるのが食料自給率。「承知の通り日本では四十を切ると三十九%の自給率になります。日本側農水省試算では農産物関税全廃の場合、食料自給率は現在39%から12%」。豪州側は日豪大使館 全廃15年後でも対日輸出量は5%しか増加しない。日本側の試算(反論)安く買えるなら自給率もよければ問題ないのではなか。毎日のように話した「温暖化」。日本向けに関税を下げ、または無償でも小麦を売ると言っているオーストラリアは大豆ほどの脅威に晒されている。

USのシーストンプの度々干ばつ。06-07年「100年に一度の大干ばつ」だった。小麦生産量は20%減(前年比)。07-08年は4%減が見込まれると報じています。食料生産そのものが怪しくなっているように思えます。生産する国が自国の食料確保にシフトしたところからいへば金を出しても売ってしまえばいいからかもしれません。私は農家で農家の立場ですが、消費者でもあります。パンも納豆も豆腐もその他もろもろ輸入に頼った食料を購入しています。その立場で物申せば本場にこの先心配です。

NPO法人「北海道食の自給ネットワーク」(札幌)事務局長のコメント「輸入食料に依存している限り、牛海綿状脳症(BSE)や鳥インフルエンザなどが起きたらびびるに決まっています。消費者も自分の食を手にするにまつ責任を感ずるべきです」

金じやんのマネー

田高・ドル安から投資マネーが金相場を押し上げていますね。調べてみました。

金の人類有史以来掘出し量は16万トン(小学校50教室程度)で大半は装飾用に使われているようですが、世界備蓄総量は3万トン→時価100兆円程度だとしてその程度の高額一喜一憂している。ちなみにキヤンメル1粒で15万円(今はお高い)。



100歳パンザイ



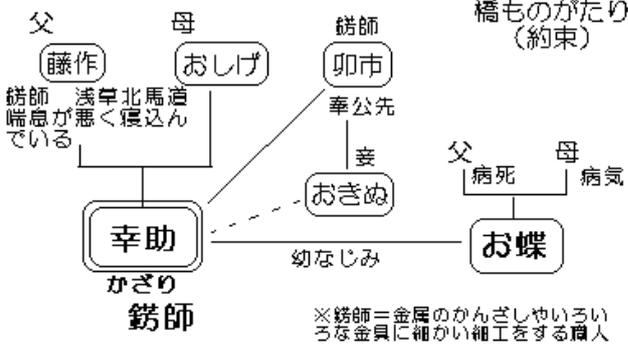
某医療機関調査による「長生きアンケート」

- 百歳以上の対象・長寿の秘訣
- 血液型・B型
- 星座・射手座(12月生まれ)
- 職業・お坊さんと学校の先生
- 食事・好き嫌いなし
- 性格・頑固
- 生活習慣・マイペース
- 酒・タバコ・無理にやめなご、飲酒とタバコは適度に楽しむ
- 自分におもしろい楽しみを持つ、ソレをいっせいで色んなことを楽しむ
- 男性の長寿にもっとも大切なのはオチャメでエッチな女

藤沢周平作品の「紹介」

我が家では藤沢ブームが起きています。冬場の農閑期には一日一冊のペースで藤沢作品を堪能しています。今回から機会あれば取り上げて傑作時代小説の世界にひと時お付き合ひ願います。

さて第一回目は「橋ものがたり」より「約束」
様々な人間が日毎行き交う江戸の橋を舞台に演じられる、出会いと別れ。市井の男女の喜怒哀楽の表情を瑞々し筆致で描いている「橋ものがたり」。



※ 鑄師 = 金属のかんざしやいろいろな金具に細かい細工をする職人

幸助は年季奉公明けで南本所小泉町の家に戻っていた。一年のお礼奉公は通いでも良かった。休みも取れる。この日幸助は幼なじみのお蝶と会う約束をしていた。七時半(午後5時きり)から小名木川に架かる萬年橋の上で。お蝶は三つ年下の十八である。五年という歳月が女をどんな大人にしたか。

お蝶の家のところへ

小屋が思わしくなく借金がかかっていた。五年前のある日、お蝶が幸助をたすね深川に越すといっぺんに来た。「仲町の潮見屋のしつ料理屋」。門前仲町界隈では女達が肉を売り男達が金をたかしてそれを賣る場所があるらしい。「心配しないで。夜はお店じゃありません。あ、たしはただ、台所を手伝っただけなんだから。」「それならよかった。……」「それならよかった。……」

「この別れを言ひたために話ねじめたのだ。

「この別れ際」言い交わした約束「五年たったら、二人でまた会おう」

お蝶を待つて一刻半経った。——五年前の約束だ。おぼえているとは限らない。おぼえていても、こない場合だ。五年の間は、人も変わるのだ。俺だ。——奉公先の卯市はおきぬという妾を囲った。卯市の使いでおきぬを訪ねるうち、おきぬの誘いに乗って間違いを犯した。——お蝶にあわせる顔がない。と思つた。——お蝶だつて変わったかもしれない。

お蝶は病気の親を抱え二年目から密に寝るようになっていた。——あたしは会いに行く資格がない。約束は忘れようともなくでも自分は幸助とあえないでいる。明日になってしまえば、萬年橋であたしを待つ人はいない。手で顔を覆った。

幸助はじつと待っている。——帰ってしまえば、それっきりだ。五年前にお蝶の流した涙を忘れることができなかつた。

「幸助さん」と呼び声を、空耳のように聞いた。——

その後幸助はお蝶の家を訪ねる。

「お蝶が承知なら一緒にしろ」「そんなことできない」「んんん。二人とも少しばかり大人の苦労を味わったことだ」「——」「少しじゃないわ」と台所に行つたお蝶が泣き泣く。その声は絞るような泣き泣き変わった。いかに来たのは間違ひではなかつたとお蝶の悲痛な泣き声がその証だと思つた。お蝶の泣く声は幸助の胸の中に流れ込む。

長い別れ別れの旅が今終わったのだと思つた。

子供の住んでいない街

先日新聞記事でちよつと市面田んぼのを見つけたので紹介します。数年前の話だが

米国「子供が一人も住んでいない街がある。平均年齢67歳、日本のように高齢化が進んだ訳ではなく、あえて老後を楽しむため現役を引退した人たちが移住した。アリゾナ州・？市。人口3万。住むには条件がある。①家族に55歳以上の人がいること。②18歳以下が3ヶ月以上同居しないこと。

市は財政支出を抑えるため、学校は作らない。役所や医療、保安官など行政サービスは現役を経験した住民ボランティアが協力。行政コスト削減と生きがい対策を両立させる目的

「ルフト電気自動車に乗って、公民館でたんさんの趣味のサークル活動。多くの人が年金と少しの貯蓄で暮らす。

かたや日本では65歳以上が半数を超える「限界集落」が共同体の維持に悲鳴を上げている。公共サービスを切り捨て財政削減。

高齢化が進むから未来がないと決めつけず先のアメリカの例のように発想の角度を少し変えてみる必要がある。

昨今では政治や行政に不満を言う人が多いが、つまりは「この世の中」に困ってしまったのは自分達国民なんですね。これからどうすればいいか。身近な「特定道路財源」や「年金問題」「防衛予算」など今までの角度を変えて考え直してみたいのではないのでしょうか。

「農民野」書して十六年目 森里七十五



森里、モロと呼んでください。オイヤはアスパラ畑で拾った仔猫です。一ヤリならならいんじいじい。ウジが牛乳をたか、おじいちゃんからませた。いまは毎朝お散歩して帰ります。